



Title	意匠学会「全国学会化・国際化の十年」
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75331
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意匠学会「全国学会化・国際化の十年」

意匠学会 前会長

藤 田 治 彦

創立50周年から60周年まで

2009年（50周年）から2019年（60周年）までは全国学会化と国際化の十年として記録できます。1959年創立の関西意匠学会は1978年に意匠学会になりましたが、大会は1989年の金沢美術工芸大学以外ほとんど京阪神開催で、全国学会とは言えませんでした。但し、改称時に簡潔で適切な英語名 The Japan Society of Design も決まりました。故上平貢元会長と建築史家、相川浩元会員の意見交換を憶えています。両名称ともに将来、国際性のある全国学会になることへの期待だったのです。

全国学会へ

関東で最初の大会は2006年に東京の杉野服飾大学で開かれました。4年に一度は関西以外で開催という方針で、2010年には関東学院大学、2014年にはお茶の水女子大学で開催しました。関東での大会には東日本だけでなく関西の会員も積極的に参加、次は2018年の予定でしたが、1年早く2017年に秋田市にぎわい交流館で開催されました。関西以外での開催はオリンピックのように4年に一度としていましたが「2～3年に一度」関西以外で開かれれば有意義です。実際、塚田新会長も全国学会化に積極的で、2020年の大会は九州大学で開かれます。

国際化へ

2008年に第6回ICDHS（デザイン史デザイン学国際会議 International Conference of Design History and Studies）を大阪大学中之島センターで開催しました。論文募集や編集はおもに大阪大学の院生が、運営と京阪神や奈良へのツアー等は意匠学会会員が積極的に協力しました。日本デザイン学会やデザイン史学会の協賛で、中心的役割を果たしたのは意匠学会です。このICDHS 2008 OSAKAはアジア初のデザイン史デザイン学国際会議で、アジアで2番目のICDHSは2016年に台北で開催されました。

私たちも国際デザイン史フォーラムを、ICDHSがバルセロナで始まった1999年に偶然大阪で始めたのですが、同分野の国際会議は一つにすべきと考えICDHSと合流、ハバナ、イスタンブール、グアダラハラ、ヘルシンキに続く第6回を大阪で開催しました。その後、デザイン史フォーラムは国内組織としては2012年に意匠学会に合流、国際交流委員会を立ち上げ、2015年にACDHT（アジア・デザイン史論国際会議 Asian Conference of Design History and Theory）をスタートさせました。この合流は意匠学会のためでもあり、国際性の高さを学会の評価基準とする日本学術会議への対応と、意匠学会とくに若手会員の国際化を助けたいと考えてのことです。国際化は中国や韓国では急速に高まり、日本では停滞または低下し、欧米では日本の美術や工芸の歴史等をそれら日本以外の研究者が教える大学も増えているのです。

デザイン史フォーラムでは、おもに日本の研究者の国際性向上を考え、英文機関誌 Design Discourse

を刊行したのですが、投稿はほとんど欧米人で、目的達成のためには別な方法が必要と考えて刊行を停止、意匠学会に合流、アジア・デザイン史論国際会議をスタートさせました。ACDHTでの発表は日本人研究者が半数以上で、残りが欧米とアジアの研究者です。次第に日本、アジア諸国、欧米からの参加者が三分の一ずつといった理想的な割合になって行くかもしれませんが、とくに日本の若手研究者の参加を期待します。200名近くが参加、多くの分科会に分かれるICDHSとは違い、ACDHTは20数名の参加者が一つの部屋で円卓会議として発表と質疑を親しく行う国際会議です。近年、他国と異なり日本からは若い世代の国際会議参加が増えていませんので、先ずはより気軽に、今のところ日本国内開催で参加費用も少なくてすむACDHTへの参加を勧めます。その経験を活かし、2016、2018等、偶数年開催のICDHSに参加するのも有意義です。ACDHTは2015（大阪）、2017（東京）、2019（福岡）の奇数年開催で、2021年は東日本、2023年は再び関西での開催が期待されています。

藝術学関連学会連合とデザイン関連学会のシンポジウム

新会長はじめ意匠学会役員全員の推薦を受け、連合委員会での選挙の結果、藝術学関連学会連合の会長に2018年に就任しました。東京中心の大規模学会ではなく、関西発祥の小規模学会からの藝関連会長選出は初めてのことで、藝関連委員会の平等観を感じます。実際、意匠学会から派遣される藝関連事務局局長にとっても多忙な3年間になりますが、美学会、美術史学会をはじめとする15の藝術学関連学会、とくに中小学会にとって、必ずしも学会規模重視ではない公平な藝関連が実感されます。藝関連シンポジウムは毎年東西交代で6月開催です。東日本開催の際は多少困難でしょうが、この10年間増え続けている東日本の意匠学会会員の方々は参加可能と思います。2019年同様、2021年には関西で開催されますので、多くの意匠学会会員の方が参加し、その他の藝術学関連学会との交流を進めていただければ幸いです。

デザイン関連学会シンポジウムは、5つの関連学会が毎年交代で開催します。2017年には意匠学会が9月例会を縮小して午後に京都工芸繊維大学で開催しましたが、2018年には芸術工学会が九州産業大学での大会シンポジウムをデザイン関連学会シンポジウムとして開きました。数年後に再び意匠学会で開催する際も、意匠学会大会のシンポジウムを5年に一度はデザイン関連学会シンポジウムとして、他の関連学会からのパネリストも含めて開催するのが一案でしょう。幸い、各関連学会からの参加者は、自費ないし各学会予算での参加になり、開催学会の出費にはなりません。また、会長、副会長だけでなく、数年に一度は大会シンポジウムとして意匠学会会員全員が交流に参加できるようになります。これも関連学会との友好を高め、会員の経験を豊かにする意義ある催しです。

小規模だが質も国際性も高い全国学会へ

意匠学会の会員数は2000年代初めまで300名以下でしたが、この10年間に300名を超え、会員数300数十名の学会になりつつあります。いくつかの学会とは異なり、減少することではなく、全国からの新入会員によってゆっくと増えています。しかし、300数十かせいぜい400名ぐらいの規模で十分だろうと思います。とくに中規模と言う必要はなく、小規模だが質も国際性も高い学会へ。1978年の意匠学会（The Japan Society of Design）への改称に込められていた理想的発展の一層の実現を、新会長をはじめ、役員、会員のみなさまに心から期待しています。